

謡曲《放生川》明和本における道行部の改訂意図

中野 顕正
川上 一

明和改正謡本(以下「明和本」)は、十五世観世大夫の観世元章(もとあき)によって明和二年(一七六五)に刊行された謡本で、各曲詞章の全面に亘って文言に改訂が施されていること、その多くが当時の国学的知見に基づいていることが知られている。本稿では、この文言改訂の意図の一端を窺わせるものとして、《放生川》ワキ登場段の道行部を検討したい。

はじめに、明和本以前の《放生川》の道行を確認する。

曇なき、都の山の朝開(あさひ)、く、けしきも
さそな①木幡山、伏見の里もとをからぬ、
②竹田河原を打過て、③淀のつき橋かけ
まくも、かたしけなしや神祭る、八幡の
里に着にけり、く、

ここでは、明け方に都を出発したワキ一行が、都から見える晴天の山々を眺めながら「この様子では木幡山の眺望もさぞや素晴らしいこ

とだろう」と想像しつつ、その山麓の伏見の里にも程近い竹田が原(後述)、次いで継橋(川の中に柱を多く立て、橋板を次々に渡した橋)の架かる淀川を通過し、八幡神を祀る男山の麓、八幡の里に到着するまでが謡われている。

このうち①「木幡山、伏見の里も遠からぬ」は、『歌枕名寄』巻一・山階篇に見える、

建保二年内裏百首 伏見 家隆
遠からぬ伏見の里の関守は木幡の峰(みね)に君
ぞ据(す)ゑける(二〇二)

【大意】伏見の里は、距離的には都から遠くない場所ですが、木幡の峰の関守によって往來に制約が生じます。そのように、私にとつては心理的距離の遠くない貴女のもとへ、足が遠のいてしまうのは、貴女が私を拒む心の関守を据えたからなのです。

の表現を利用したものと思われる。なお、当該歌は勅撰集の『新後拾遺集』(至徳元年完成)(一三六六)にも入集しているが、『放生川』執筆の際に参

照されたのはむしろ『歌枕名寄』の如き歌枕関連の類書であつたと推測されよう。

②「竹田河原」は「竹田が原」が正しく、既に伊藤正義(新潮日本古典集成謡曲集)頭注の指摘する通り、山城国の歌枕である(現在の京都市伏見区竹田)。「竹田が(の)原」の和歌初出例は、『万葉集』巻四に見える、

打渡 竹田之原(ウチワタス タケタノハラニ) 鳴鶴之間(ナリツツノ) 無時無(マナクトキナシ) 吾恋(ワガコイ)
良久波(ラクハ)(七六〇・大伴坂上郎女)

の歌で、以後の「竹田が(の)原」を詠んだ和歌はいずれもこの歌の本歌取りと認められる。もつとも、この万葉歌における「竹田之原」は本来は大和国の地名であるが、後代になると、例えば藤原範兼(一一〇七〜六五)編『五代集歌枕』がこの歌を「たけだのはら 山城」として掲出しているように、「竹田が(の)原」は山城国の地名として理解されるようになった。さらに南北朝〜室町期頃には、

〔太平記 卷三十一・無二 劍璽(ケンゼ) 御即位無(ミイタビナシ) 例事付院御所炎上事〕

元弘・建武ノ乱ヨリ以来回祿二逢ヌル所々
ヲ数レバ、(中略)竹田二近キ伏見殿
〔為尹千首〕 ※応永(一四一五)二十二年詠進
うち群(むら)れて竹田の若菜摘み暮らし帰るや
近(ちか)き伏見(ふしみ)なるらん(四八・題「田若菜」)

と見えるように、竹田は伏見に程近い土地として認識されていたことが知られる。なお謡曲《融》にも「伏見の竹田」と見える。

③「淀の継橋」は、『万葉集』巻四の、

真野之浦乃 与騰乃継橋 情由毛 思哉妹
ガイメニシムル 与トノノツギノハシ コロヨモモ オモフヤイモ
之 伊目尔之所見(四九〇・吹芟刀自)

の歌に基づく語である。もっともこの歌は、真野浦(摂津国)の淀みに架けてある橋を詠んだものであり、本来は山城国の淀(現在の京都市伏見区淀)を詠んだものではなかった。しかし後代には、例えば『八雲御抄』巻五(名所部)・橋項で「よどのつぎ(はし)」が山城国の地名とされているように、山城国についての文脈で用いられる例も登場した。

以上①②③に見られるように、『放生川』道の行程は、中世の和歌・歌学的言説を基盤として構築されたものと言える。その経路は、京都東部から南下し、現在の伏見区竹田地区、同淀地区を通過して男山へと至るものであった。後代、京都の東洞院通りを南へ延長する形で竹田街道が整備され、竹田街道へと続く京都の玄関口は竹田口と呼ばれるようになる(現在のJR京都駅東端南側付近)が、ワキ一行が通過したのも恐らくこれに近似する経路であったと考えられよう。

そこで、次に明和本を確認しよう。

曇りなき、都の山のあさぼらけ、く、
けしきもさぞな木幡山、伏見の里も遠か
らぬ、鳥羽の細道うち過て、淀のつぎ橋
かけまくも、かたじけなしや神まつる、

八幡山にも着にけり、く、

この中では、竹田が原ではなく「鳥羽の細道」を通過する経路が示されている(観世流現行詞章はこれを踏襲)。「鳥羽の細道」とは鳥羽作道のことで、朱雀大路(後の千本通り)から鴨川・桂川合流地点付近へ向かって南下する古道道であった。すなわち明和本では、ワキ一行の出発地点を竹田口付近ではなく千本通り(旧朱雀大路)に改める形で、改訂を施していたのである。それでは、この改訂の意図はどこにあったのだろうか。

近世、旧鳥羽作道に由来する鳥羽街道が整備されていたから、当時の実態として、京から男山への行程の中で「鳥羽の細道」を通ることは勿論あり得たであろう。とはいえ一方竹田街道も重要道路の一つとして機能し続けていたし、詞章中に木幡山・伏見の名が見えている以上、そこの地理関係からいえば竹田を経由する従来の行程の方が自然である。すなわち明和本は、従来の経路でも支障が無いにも拘わらず、ことさらに千本通りを出発する形へ改めたと言えるのである。

とすれば、この経路変更は、朱雀大路を中心とする古代都市平安京としての観念的な京都理解に基づくものではなかったか。周知の通り、京都(平安京)が朱雀大路を中心とする碁盤の目状の都市であったのは遠い古代のこと、中世以降の都市京都、特にその南側

では、千本通り(旧朱雀大路)はむしろ西の外れに位置し、朱雀大路の南端にあった平安京の総門・羅城門もとうの昔に廃絶していた。しかし明和本にとり、京から男山へ向かうワキ一行は、あくまで旧朱雀大路から——かつての帝都平安京の中心から、出発する存在でなくてはならなかったのである。

明和本『放生川』道行部の改訂の根底にあったのは、こうした永遠の帝都・平安京への意識だったのでなかろうか。こうした点に、国学を愛好した観世元章の国家観・帝都観の一端が窺われるように思われるのである。

* 古代都市平安京から中世都市京都への変貌については、桃崎有一郎『平安京はいらなかった』(歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、二〇一六年)に詳しい。

明和本以外の引用は以下の文献による。『放生川』…光悦謡本(特製本)／和歌・新編国歌大観(但し『万葉集』の歌番号は旧国歌大観による)／『八雲御抄』…久曾昇『校本八雲御抄とその研究』厚生閣、一九三九年／『太平記』…日本古典文学大系。

本稿は、著者両名および浅井美峰氏の三名で進めている共同研究「世阿弥協能を中心とした謡曲詞章の和歌・連歌的手法に基づく表現分析」(法政大学能楽研究所・能楽の国際・学際的研究拠点)令和四年度公募型共同研究の成果の一部である。

(中野・弘前大学助教／川上…慶應義塾大学大学院生)